

**歌** 舞妓の演目に「葛の葉」がある。信太の森の白キツネが安倍保名と結び合って安倍晴明が生まれたという伝説を劇化したもので、キツネの化身、葛の葉が正体を現し、「恋しくば尋ねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の歌を障子に書き残して愛児に別れを告げるという「葛の葉子別れの段」が特に有名である。「古今和歌集」にも「あらしふく真葛が原に鳴く鹿は恨みてのみや妻を恋ふらん」という俊恵の歌があるように、クズは恋や恨みに深い因縁を持つ植物とされてきたようだ。

**ク** ズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi はマメ科の植物で、10mにも及ぶつるをのばして繁茂する。クズの葉は比較的大きな3枚の複葉で、日中の強い日差しを浴びると両側の2枚の葉が立ち、白い裏側が目だって見えるようになる。クズが別名で「裏見草」と呼ばれたのはそれ故で、恋や恨みにまつわる古歌にも歌われるようになったと思われる。

**1** 930年代のアメリカでは、日本から大量に送られたクズを利用してテネシー川流域に広がる荒地を緑化する計画に成功した例がある。しかし、間もなく、クズの1日の間に数十mも伸びるという旺盛な繁殖力によって、あっという間にあたり一面がクズの葉で覆い隠されるようになり、一時期はクズの女王コンテストが開かれるまでに人気を高めたクズは、一転してdevil's tongue とかgreen snake などと呼ばれて嫌われるようになったという。

**ク** ズの地上部のほとんどは冬には枯れるが、宿根草としての根は地下に大人の脚ほどの太さと長さに成長して残る。掘り出された根の周皮(コルク層)を除き、切片として乾燥させたものが生薬「葛根」である。

『神農本草經』には中品として記載され、「味は甘く平であり、喉の渴きを消し、身体の大熱、嘔吐、もうろもろの痺を取り去る。陰気を起こし、諸毒を解す」とある。一般には、汗の出ない風邪などの発汗、解熱や、筋肉の痙攣、緊張の緩和、止瀉、消渴に効力があるとされている。この効能は「葛根湯」の薬能に共通する。

**落** 語の世界にも「葉好き」のご隱居が登場して、何かというと周りの人たちに「葛根湯をお飲みよ」といってすすめる話があるように、「葛根湯」は漢方薬の中でことさら有名である。「葛根湯」の処方は桂枝、大棗、芍薬、甘草、生姜を配合した「桂枝湯」に葛根と麻黄を加えたものだが、上に述べたように、7味からなる「葛根湯」にあっても葛根がこの処方の主薬であることはわかる。

**は** るか昔、学生時代に先輩方に導かれながら講読した『傷寒論』に、「太陽病、項背強張ること几々、汗無く惡風するもの、葛根湯之をつかさどる」と書かれた文章が妙に印象に残ったことが思い出される。なるほど、漢方では首筋や肩の凝りをこのように表現するのだということに素朴な感動を覚えたのであった。それからは、学友たちに「惡寒して汗なく、項背の強ばるときは風邪の初期症状」などと、横丁のご隱居まがいのことを口走って煙たがられたりした思い出もいまは懐かしい。

**葛** 根の成分としては澱粉の含量が圧倒的に多く、葛粉は昔から良質な澱粉の代表として使われてきたが、葛根の薬効に関してはマメ科特有の成分ともいえる daidzein 、 daidzin 、 puerarin 、 genistein 、 formononetin などのイソフラボンの含有が重要な役割を果たしていると思われる。

**こ** れらのイソフラボン類は、動物実験において血管の拡張、血流の改善にともなう血圧降下作用、血小板凝集抑制作用を示した他、血中コレステロール、あるいはトリグリセリドを低下させ、高脂血症を改善させる可能性を示した。また、ペプトンで発熱させたウサギに葛根の水浸液を飲ませたところ、1~2度の体温の下降が観察された。このような結果は、葛根が項背の強ばりを治し、熱を下げるという薬効を裏づける。



別名「裏見草」。  
されど葉効用多様で確実

/千葉大学 名誉教授

幹夫

Yamazaki